

千葉市草刈場貝塚

— 倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2025

有限会社 チバニュータウン開発
千葉市教育委員会
株式会社 ノガミ

く さ か り ば か い づ か

千葉市草刈場貝塚

— 倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2025

有限会社 チバニュータウン開発
千葉市教育委員会
株式会社 ノガミ

例 言

1. 本書は千葉市若葉区貝塚町973他に所在する草刈場貝塚の倉庫建築に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理は千葉市教育委員会が主体となり、有限会社チバニュータウン開発からの委託を受けた株式会社ノガミがこれを支援した。
3. 調査地点は千葉市若葉区貝塚町973-1・4（地番）に所在する。
4. 発掘調査の期間、面積、担当は下記のとおりである
調査期間：令和6年5月7日～5月16日
調査面積：11.00㎡
担当者：松田光太郎（千葉市埋蔵文化財調査センター主任主事）
調査員：小川幹太（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部調査研究員）
5. 整理作業及び報告書作成は株式会社ノガミ関東支店で行い、令和7年3月28日に終了した。
6. 遺構図面は電子平板で測量し、デジタルトレースにより作成した。遺構写真は調査担当者小川幹太が撮影している。
7. 本書の執筆は下記のとおりである。
第1章第1節「調査に至る経緯と経過」は千葉市教育委員会（松田光太郎）、本文中の遺構等については小川幹太、出土土器の分類と型式については松田氏助言のもと、第2章と第4章は宮内勝巳と折原繁が担当した。遺物写真と写真図版作成は秋山真好が作成した。第3章動物遺体の分析については、貝類を千葉市埋蔵文化財調査センター 西野雅人氏、魚類・哺乳類は千葉市教育委員会文化財課服部智至氏に依頼した。
8. 発掘調査の出土資料及び調査記録は千葉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から報告書刊行まで次の諸機関、諸氏のご指導ご協力を頂いた。（敬称略）
千葉県教育委員会文化財課、千葉市教育委員会、千葉市埋蔵文化財調査センター
本多昭宏、白崎智隆、林克彦

凡 例

1. 本書に使用した地形図及は下記のとおりである
第1図は国土地理院発行 1/25,000 平成9年刊行
第2図は千葉市都市計画図 1/2,500
2. 遺構番号は遺構の特徴等により土坑を「SK」、小穴及び柱穴状は「SP」を使用した。
土層観察については『新版 標準土色帖』43版 2023.1を使用した。
3. 図面の縮尺
・調査区全体図 1/40 遺構配置図 1/50 土層断面図 1/40
・遺構の平面図及び土層断面図 1/40
4. 遺物の縮尺 ・土器及び拓影図 1/3

目 次

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の概要と方法	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第2章 検出された遺構と遺物	5
第1節 調査区の土層	5
第2節 調査の概要と検出された遺構	5
第3節 出土土器	15
第3章 動物遺体の分析	28
第4章 まとめ	31

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡位置図 1/25,000	第9図 包含層A2 出土土器 (1)
第2図 遺跡範囲及び調査地点 1/2,500	第10図 包含層A2 出土土器 (2)
第3図 遺構配置図 (確認調査) 1/50	第11図 包含層A3 出土土器 (1)
第4図 第1面検出遺構全体図・土層断面図 1/50	第12図 包含層A3 出土土器 (2)
第5図 第1面検出遺構	第13図 SK01 出土土器 (1)
第6図 第2面検出遺構	第14図 SK01 出土土器 (2)、SK02、SK03 出土土器
第7図 第3面検出遺構	第15図 魚種組成 (NISP)
第8図 確認調査埋戻土・精査・包含層A1 出土土器	

表 目 次

第1表 貝種同定結果	第4表 魚類種名表
第2表 貝種組成	第5表 魚類同定結果 (NISP)
第3表 貝類計測値分布	

写真図版目次

図版1 調査区及び検出遺構	図版4 包含層A2 出土土器 (2)
図版2 検出遺構	図版5 包含層A3 出土土器
図版3 確認調査、精査、包含層A1・A2 (1) 出土土器	図版6 SK 0 1 出土土器
	図版7 SK 0 2、SK 0 3 出土土器

第1章 遺跡の概観

第1節 調査に至る経緯

令和4年12月2日付けで有限会社MKサービスから、倉庫建設を計画している千葉市若葉区貝塚町972他16筆（面積8,766㎡）について、「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出され、令和4年12月22・23日に試掘を実施した結果、住居跡や貝層が検出された。そこで令和5年1月10日、4千教埋セ第391号にて、発掘調査を実施するように通知した。

MKサービスと協議の結果、大部分は盛土を行った上で工事を実施するものの、道路に接続するスロープ部分は発掘調査が必要ことが明らかとなった。そしてその後もMKサービスと協議を重ね、スロープ部分も大部分が盛土工法をとることになり、スロープと道路が接する北端部のみが発掘調査を避けられない箇所となった。また同敷地内には赤道の切り回しが計画されていたが、千葉市路政課および土木管理課との協議の結果、敷地内に赤道を新設しないことになった。以上により掘削工事で埋蔵文化財包蔵地に影響を与える範囲が14.50㎡と確定したため、当該地の土地所有者である有限会社チバニュータウン開発より、令和6年3月22日に確認調査の依頼が提出された。そこで千葉市教育委員会は3月22日付け5千教埋セ第599号にて、千葉県教育委員会教育長宛て、「埋蔵文化財発掘調査の報告」を提出し、令和6年3月29日～4月2日にかけて確認調査を実施した。調査の結果、住居跡と思われる覆土が2箇所、土坑と思われる覆土が2箇所認められた。これらの遺構覆土は確認調査必要範囲の大部分に及んでいたため、4月5日、確認調査必要範囲（事業範囲）全域の14.50㎡が本調査範囲となることを、千葉県教育委員会教育長および有限会社チバニュータウン開発に報告した（6千教埋セ第3号）。なお確認調査の表土掘削は小型重機を使って行ったが、工事で掘削対象となる事業範囲の東西幅よりも重機のバケット幅が広がったため、一部、確認調査の必要範囲よりも東側に広く、表土を除去した。また調査区の西側は歩道に沿うU字溝が施工されていて、全面的に攪乱となっていた。確認調査終了後、埋め戻しは行わず、本調査に移行したため、本調査では表土は認められない状況であったこと付記しておく。

その後、事業者との協議で、本調査範囲は実際の掘削が及ぶ11.0㎡となり、4月17日、有限会社チバニュータウン開発より本調査の依頼が提出された。そこで4月23日付け6千教埋セ第33号により千葉県教育委員会教育長宛て埋蔵文化財発掘の報告（発掘届）を提出し、事業者の委託を受けた株式会社ノガミの支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、5月7日～5月16日に発掘調査を実施した。

第2節 調査の概要と方法

調査地点は草刈場貝塚の南東部に位置している。第3図に示したように確認調査では暗褐色土の落ち込みや堆積が多く確認され、また、貝を多く含む混貝土層がほぼ全域に確認されたことから、住居跡や土坑等が想定される状況であった。5月7日は降雨のため、現地にて打ち合わせ協議と発掘機材等の搬入作業を行った。5月8日から測量を開始し、公共座標を使用した1辺5mのグリッドを設定した。この座標を用いて調査区内をA1、A2、A3に区分し、面的に包含層を掘り下げた。遺構が検出された包含層は3面に渡り、4面のソフトローム層上面が整地の基盤層となる。検出遺構順に番号をあたえたが、整理作業の段階で遺構種別ごとに区分し、報告書でもこの番号を使用している。遺構は電子平板測量で平面図を作成し、土層断面図は手測りで行った。5月16日に調査機材を搬出して現地作業を終了した。

第3節 遺跡の位置と環境

本遺跡は、JR総武本線都賀駅の南南西約1.2kmにあって、近隣には京葉道路の貝塚ICが所在する。地理的には、東京湾に面する下総台地の西端にあたり、千葉市緑区誉田町を水源とする都川本流と千葉市若葉区源町六方調整池を水源とする霞川とが合流して東京湾に流下する河口部付近に位置している。遺跡は、合流地点から北東に侵入していく貝塚町枝谷に面した標高約31mの台地上に所在する。この台地上周囲の遺跡は台門貝塚、荒屋敷貝塚、荒屋敷西貝塚、草刈場貝塚の4大貝塚に荒屋敷北遺跡、草刈場南貝塚、新堀込西遺跡、新堀込東遺跡を加えて貝塚町貝塚群と呼称している。平成29年に国の特別史跡に指定された加曽利貝塚は全国的に知られている。周辺には国指定史跡の貝塚、荒屋敷貝塚、やや離れた都川対岸には月ノ木貝塚が所在している。

『史跡加曽利貝塚総括報告書』（2017千葉市教育委員会）を参照して周辺の縄文時代遺跡を時代順にみると、前期では、荒屋敷西遺跡（36）、宝導寺台遺跡（43）、加曽利貝塚東傾斜面（2）、古山遺跡（68）があり、特に宝導寺台遺跡では2mに及ぶ貝層と焚火跡が確認され、加工場型貝塚とされている。

中期では、荒屋敷貝塚（37）、加曽利貝塚（2）、月ノ木貝塚、へたの台貝塚、菱名貝塚、長谷部貝塚、城之腰遺跡（83）、蕨立貝塚、愛生遺跡、餅ヶ崎遺跡、すすき山遺跡、海老遺跡（17）、荒屋敷北貝塚（34）、広ヶ作貝塚（62）、滑橋貝塚（61）、中籬貝塚、うならす遺跡があり、大型貝塚は阿玉台式後半から加曽利E式の後半までに廃絶され、E式末には大型貝塚が皆無となり小規模な集落の点在が確認される。

後期では、矢作貝塚（74）、廿五里北貝塚（3）、草刈場貝塚（1）、台門貝塚（39）、花輪貝塚（56）、加曽利貝塚（2）、誉田高田貝塚、川井遺跡、多部田貝塚、押元貝塚、築地台貝塚があり、都川水系に大型貝塚が形成される。

晩期では、加曽利貝塚（2）、矢作貝塚（74）、台門貝塚（39）があり、遺跡数の減少とともに貝層形成が低調となる。

草刈場貝塚は都川水系の貝塚町枝谷の東岸に位置し、標高は約30mを測る台地の平坦部に所在している。現在までに本格的な発掘調査は行われておらず、表探と部分的な発掘調査資料の収集が知られているのみである。酒詰伸男による昭和2年の発掘調査では中央の窪地の存在が指摘されている。

遺跡全体の規模は東西約330m、南北約240mと広大であり、貝塚は馬蹄形を呈し南東方向に開口部をもつ南北約180m、東西約170mの規模が確認されている。

草刈場貝塚は加曽利貝塚のほぼ真西約1.8kmに位置し、徒歩25分前後、言うなれば「ご近所」の隣村とも云える位置にある。また、地続きの同じ台地上には草刈場北遺跡、地点貝塚を伴う貝殻後遺跡、向ノ内遺跡、荒屋敷北貝塚が近接している。周辺には多くの貝塚が確認されており、貝塚の集中した地域であることが周知されている。このことは、当地域が遼遠の内海に面した良好な自然環境であったことが考えられ、貝塚の存在は海からの豊かな恵みを得ていたことを示している。

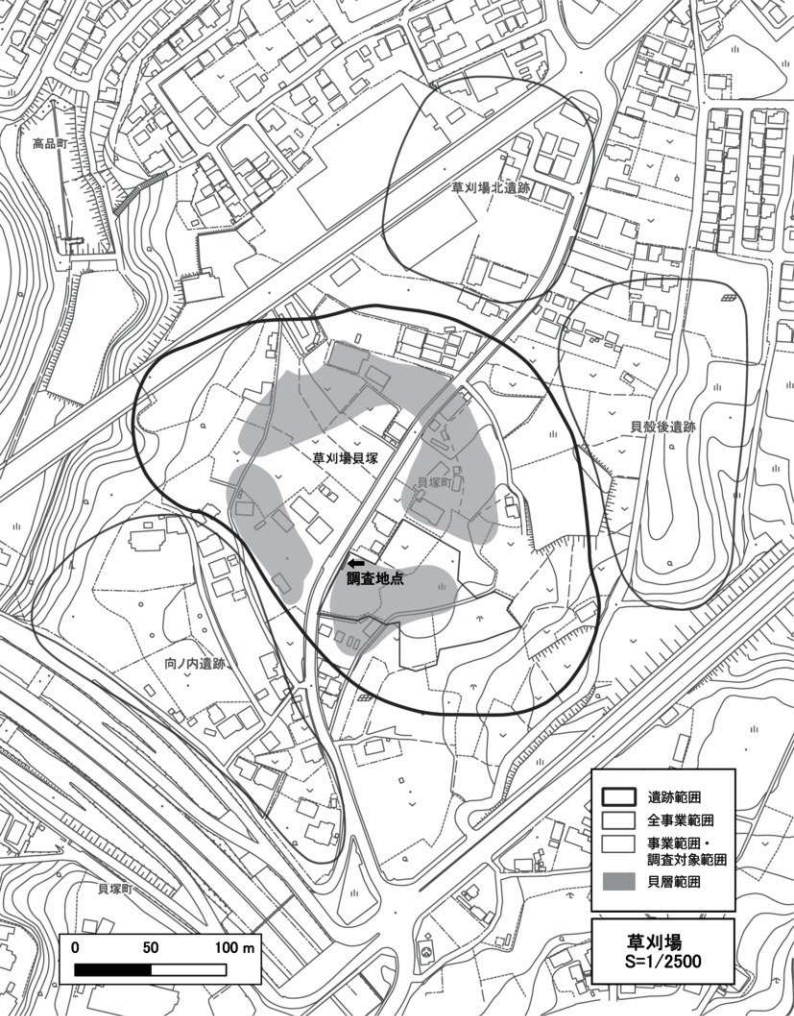
縄文時代後期以降になると台地の浸食と土砂の流出と堆積が進むなか、内海は徐々に後退しラグーン化して、汽水域から淡水化して行ったと考えられ、縄文時代晩期後半から弥生時代中期初頭頃には葦（葎）が生い茂る湿地となり、更に台地を浸食した河川によって運ばれた土砂は湿地の陸化を促し、稲作に適した土地が徐々に拡大したと考えられる。



1. 草刈場貝塚 2. 加曾利貝塚 3. 廿五里道跡 4. 根崎道跡 5. 中広道跡 6. 北原道跡 7. 北原道跡 8. 大塚原道跡
9. 東寺山貝塚 10. 江戸向道跡 11. 稲毛台北道跡 12. 稲毛台東道跡 13. 台畑道跡 14. 谷津頭道跡 15. 山王道跡 16. 耳切道跡
17. 海老道跡 18. 戸張作道跡 19. 石神道跡 20. 殿山道跡 21. 宮腰道跡 22. 高品第2道跡 23. 尻龜道跡 24. 草刈場北道跡
25. 谷ツ上道跡 26. 谷津上道跡 27. 須摩堀道跡 28. 西向道跡 29. キツ長南道跡 30. 香田道跡 31. 南台道跡
32. 東田道跡 33. 向ノ内道跡 34. 荒屋敷北貝塚 35. 貝堤道跡 36. 荒屋敷西道跡 37. 荒屋敷貝塚 38. 干場道跡 39. 台門道跡
40. 殿山道跡 41. 下内道跡 42. 貝塚向道跡 43. 宝尊寺台道跡 44. 木戸場道跡 45. 向ノ台道跡 46. 都町・山王道跡
47. 車坂道跡 48. 大作道跡 49. 立木道跡 50. 熊ノ台道跡 51. 松原道跡 52. 和田前西道跡 53. 聖人塚道跡 54. 立木南道跡
55. 花輪道跡 56. 花輪貝塚 57. 田向南道跡 58. 南大作道跡 59. 加曾利貝塚隣接地道跡 60. 京町台道跡 61. 滑橋道跡
62. 広ヶ作道跡 63. 若松・広ヶ作道跡 64. 滑橋台南道跡 65. 柳沢道跡 66. 玄蔭道跡 67. 八津田道跡 68. 古山道跡 69. 若郷道跡
70. 永作西道跡 71. 永作北道跡 72. 永作道跡 73. 永作南道跡 74. 矢作貝塚 75. 井台道跡 76. 矢作三山塚道跡
77. 和唐地道跡 78. 琵琶首台道跡 79. 星久喜道跡 80. 高崎台道跡 81. 下和田道跡 82. 上和田道跡 83. 城之腰道跡 84. 宮ノ前道跡
85. 東屋敷道跡 86. 瀬ノ谷道跡 87. 貝殻後道跡



第1図 周辺遺跡位置図



第2図 遺跡範囲及び調査地点

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 調査区の土層（第4図）

本調査区では、人為的な整地面が3面確認されている。この3面の土層はほぼ水平に堆積していることから、人為的に利用されたと考えられる。調査区北東壁の土層断面では第Ⅰ層から第Ⅶ層が観察された。但しⅦ層については部分的に焼土が多く含まれた層であり、焚火等の痕跡が残された結果と解釈することもできる。

調査地点は草刈場貝塚の北西端に位置しており、純貝層は見られず土層断面の観察では貝類の混入した混貝土層あるいは混土貝層が見られ、貝の堆積は多いとは言えない状況である。

Ⅰ層 表土（耕作土）

Ⅱ層 黒褐色土層 上面の掘り込み→第1面遺構

Ⅲ層 鈍い黄褐色土

Ⅳ層 黒褐色土層 上面の掘り込み→第2面遺構

Ⅴ層 暗褐色土 上面の掘り込み→第3面遺構

Ⅵ層 暗褐色土

Ⅶ層 黒褐色土層 部分的に焼土を多く含む

ハードローム面

第2節 調査の概要と検出された遺構（第4図）

調査は公共座標杭を基にして基底幅約70cmのトレンチ内を北よりA1、A2、A3に区分した。

既に確認調査で住居跡とされていた遺構2か所、土坑2か所を掘り下げることにした。

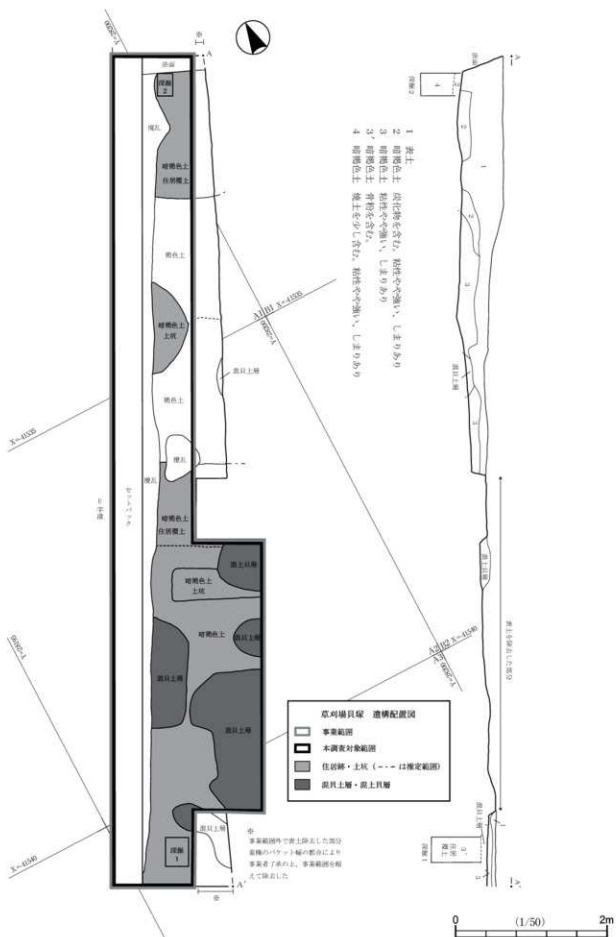
トレンチは、先行した確認調査により第1面（Ⅰ層除去）まで掘り下げられており、その時点でA1区の北隅に暗褐色土の落ち込みが確認されており、住居跡とされていた。移植鋤で掘り下げていったところ、南側に傾斜面を構成しながら深さ60cmまで下がり、ここで1段テラスを有し、更に急傾斜となって深さ110cmで平坦面に達した。平坦面の長さは190cmまで確認したが、更に北に伸びていると考えられる。底面の精査により、中央部にSP11が確認された。土層断面の観察によりSK01より古い遺構と判断した。

A1区南側に暗褐色土の土坑プランが確認されており、掘下げたところSK02を検出した。A2区南側に混貝土層の集中部が確認されており、掘下げたところSK03を検出した。

トレンチ内を平面的にスコープにより廃土し、第2面（Ⅲ層除去）まで掘り下げた。A1～A2区の東壁断面にかけてSP09、10が検出された。

確認調査時にA2区で確認されていた住居覆土とおもわれる暗褐色土層（Ⅳ層）を除去し、掘り下げにかかったところプランは縮小してピット状の遺構となった。これがSP12である。東壁ギリギリの所に位置しているため、調査区全体図には反映されなかった。ついでスコープによりⅤ、Ⅵ層を平面的に除去し、ローム面に達したが遺構は確認できなかった。

最終的に土坑3基とピット12基が検出された。検出された遺構の覆土は土坑・ピットとも黒褐色もしくは暗褐色土を基調とし、褐色土が大小ブロック状に含まれている。また焼土、炭化物も均一的に含まれる。検出された土坑のうちSK01は有段で深く、規模も大きいことから貯蔵穴の機能を有するものかも知れない。より大面積の調査が望まれる。検出されたピットは断面形状がロート状を呈し、底面が先細りするものが多い。柱痕などは認められず屈曲する断面形状などから建物の柱とは考えにくい。特にSP09とSP10については覆土の締りも弱く、今回遺構としたが今後の調査に判断をゆだねたい。



第3図 遺構配置図 (確認調査)

調査区土層説明

SK02	1層	暗褐色	10YR3/3	10YR4/4褐色10%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
SP02	1層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色5%混入。径1～5mmの焼土粒5%含む。径1～5mmの炭化物5%含む。貝片10%含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
SK03	1層	黒褐色	10YR2/3	混土貝層。10YR4/4褐色5%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
SK01	1層	灰黄褐色	10YR4/2	10YR4/4褐色ブロック10%混入。径1～3mmの焼土粒5%含む。径1～3mmの炭化物10%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	2層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色小ブロック20%混入。径1～5mmの焼土粒20%含む。径1～5mmの炭化物80%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	3層	暗褐色	10YR3/3	10YR4/4褐色ブロック50%混入。径1～5mmの焼土粒20%含む。径1～5mmの炭化物30%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	4層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色20%混入。径1以下mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	5層	オリーブ褐色	2.5Y4/3	10YR4/4褐色小ブロック2%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	6層	黒褐色	10YR2/2	10YR4/4褐色小ブロック5%混入。径1～5mmの焼土粒10%含む。径1～5mmの炭化物20%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	7層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色小ブロック2%混入。径1～5mmの焼土粒80%含む。径1～3mmの炭化物10%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	8層	黒褐色	10YR2/3	10YR4/4褐色小ブロック10%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物10%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	9層	黒褐色	10YR3/2	10YR5/4にぶい黄褐色(ローム層)ブロック20%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
SP07	1層	黒褐色	10YR2/3	混土貝層。10YR4/4褐色5%混入。径1～3mmの炭化物2%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	2層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色小ブロック5%混入。径1～3mmの焼土粒20%含む。径1～5mmの炭化物20%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	3層	黒褐色	10YR2/2	10YR4/4褐色小ブロック10%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物10%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	4層	暗褐色	10YR3/3	10YR4/4褐色小ブロック20%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
SP01	1層	灰黄褐色	10YR4/2	10YR4/4褐色小ブロック5%混入。径1mm以下の焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	2層	暗褐色	10YR3/3	10YR4/4褐色ブロック5%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	3層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色小ブロック20%混入。径1～3mmの焼土粒20%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	4層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色ブロック10%混入。径1～3mmの焼土粒2%含む。径1～5mmの炭化物10%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
SP09	1層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色小ブロック20%混入。径1～3mmの炭化物10%含む。しまりややあり粘性やや弱い。
SP10	1層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色ブロック20%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり粘性やや弱い。
SP12	1層	灰黄褐色	10YR4/2	10YR4/4褐色ブロック10%混入。径1mm以下の焼土粒2%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり粘性やや強い。
	2層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色ブロック20%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり粘性やや強い。
SP03	1層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色小ブロック2%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	2層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色小ブロック2%混入。径1～3mmの焼土粒20%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	3層	黒褐色	10YR2/3	10YR4/4褐色小ブロック2%混入。粘性やや強い径1～3mmの焼土粒40%含む。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
SP04	1層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色5%混入。径1～5mmの焼土粒5%含む。径1～5mmの炭化物5%含む。貝片30%含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
SP05	1層	暗褐色	10YR3/4	10YR4/4褐色小ブロック2%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	2層	黒褐色	10YR2/2	10YR4/4褐色2%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。貝片10%含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
SP06	1層	黒褐色	10YR2/3	混土貝層。10YR4/4褐色5%混入。径1～3mmの炭化物2%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
	2層	黒褐色	10YR2/2	10YR4/4褐色小ブロック5%混入。径1～5mmの炭化物10%含む。貝片10%含むしまりややあり。粘性やや強い。
	3層	黒褐色	10YR2/3	10YR4/4褐色ブロック10%混入。径1～3mmの炭化物10%含む。貝片5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。
SP08	1層	黒褐色	10YR3/2	10YR4/4褐色20%混入。径1mm以下の焼土粒5%含む。径1～3mmの炭化物10%含む。貝片10%含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
SP11	1層	灰黄褐色	10YR4/2	10YR5/4にぶい黄褐色(ローム層)ブロック40%混入。径1～3mmの炭化物5%含む。しまりややあり。粘性やや強い。

第1面の調査（第4・5図）

SK01

位 置：A1・B1グリッド

重複関係：SP01に切れ、SP11を切る。

形状・規模：平面形は遺構の大半が調査区外に延びるため不明である。断面形状は深い皿状を呈し、南側にテラスを有する。底面は平底である。長軸422cm×短軸不明×深さ108cmを測る。

覆 土：9層が堆積する。暗褐色土、黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物をやや多く含む。深さもあり、南側に段を有することから、1軒の堅穴住居跡とは考えにくい。

検出状況・所見：遺構の埋没後中央にSP01が掘りこまれる。その後1層が堆積したと考えられる。

遺 物：第13・14図に35点を掲示した。

SK02

位 置：A1グリッド

重複関係：なし

形状・規模：平面形は楕円形を呈すと考えられ、遺構の西側は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈し比較的浅い土坑である。長軸128cm×短軸不明×深さ12cmを測る。

覆 土：1層が堆積する。覆土は暗褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土の染み状態で確認された。

遺 物：第14図に5点を掲示した。

SP02

位 置：A2グリッド

重複関係：SP03を切る。

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられ、遺構の東側は調査区外に延びる。断面形状はU字状を呈し、底面は若干丸みを帯びる。長軸50cm以上×短軸52cm×深さ46cmを測る。

覆 土：1層が堆積する。覆土は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物のほか、貝殻片を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土の土坑様の落ち込みとして確認された。

SP07

位 置：A2・A3グリッド

重複関係：なし

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はロート状を呈し、底面は若干先細りする。平面形は楕円形を呈すと考えられ、遺構の西側は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈し比較的浅い土坑である。長軸78cm×短軸不明×深さ122cmを測る。

覆 土：4層が堆積する。覆土は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物をやや多く含む。1層は貝殻片を多く含む混土貝層である。

検出状況・所見：確認調査時にスポット状の混貝土層として確認された。

SK03

位 置：A2グリッド

重複関係：なし

形状・規模：平面形は楕円形を呈すと考えられ、遺構の西側は調査区外に延びる。断面形状は皿状を呈し比較的浅い土坑である。長軸152cm×短軸不明×深さ22cmを測る。

覆 土：1層が堆積する。覆土は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む、貝殻片を多く含む

混土貝層である。

検出状況・所見：確認調査時に大型円形状の混土貝層として確認された。

遺物：第14図に9点を掲示した。

SP01

位置：A1・B1グリッド

重複関係：SK01、SP11を切る。

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はロート状を呈し、底面は先細りする。長軸96cm×短軸不明×深さ106cmを測る。

覆土：内部は暗褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時は暗褐色土が広がり、住居跡と思われたが、調査の進行に伴いビットとなった。

SP03

位置：A2グリッド

重複関係：SP02に切られる。

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はU字状を呈し、底面は若干平底である。長軸50cm以上×短軸52cm×深さ46cmを測る。

覆土：3層が堆積する。覆土は黒褐色・暗褐色土を基調とし、焼土を多く含み、炭化物も若干含む。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土の住居跡とされたが、調査の進行に従いビットとなった。

SP04

位置：A2グリッド

重複関係：SP05を切る。

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はU字状を呈し、底面は若干丸みを帯びる。長軸50cm×短軸不明×深さ38cmを測る。

覆土：1層が堆積する。覆土は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含み、貝殻片を多く含む混土貝層である。

検出状況・所見：確認調査時に混土貝層の住居跡とされたが、調査の進行に従いビットとなった。

SP05

位置：A2グリッド

重複関係：SP04に切られる。

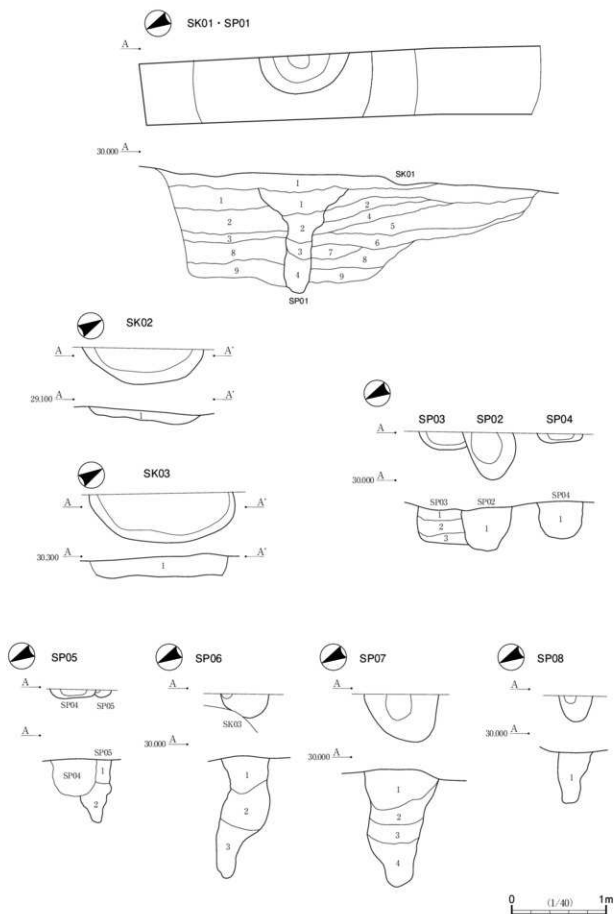
形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はロート状を呈し、底面は先細りする。長軸16cm×短軸不明×深さ66cmを測る。

覆土：2層が堆積する。覆土は黒褐色・暗褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む。貝殻片を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土層の面が確認されたが、調査の進行に従いビットとなった。

SP06

位置：A2グリッド



第5図 第1面検出遺構

重複関係：なし

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はロート状を呈し、やや曲がりながら底面は先細りする。長軸50cm×短軸不明×深さ125cmを測る。

覆土等：覆土は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む。1層は貝殻片を多く含む混土貝層である。2、3層は貝殻片を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時に混土貝層の大規模な広がり方が確認されたが、調査の進行に従いビットとなった。

SP08

位置：A3グリッド

重複関係：なし

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられるが、遺構の東側の大半は調査区外に延びるため形状は不明である。断面形状はやや細いU字状を呈し、底面は若干丸みを帯びる。長軸36cm×短軸不明×深さ34cmを測る。

覆土等：覆土は黒褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む、貝殻片を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時にスポット状の混土貝層が確認されたが、調査の進行に従いビットとなった。

第2面の調査（第6図）

SP09

位置：A2グリッド

重複関係：なし

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられ、遺構の東側は調査区外に延びる。断面形状はロート状を呈し、底面は先細りする。長軸28cm×短軸不明×深さ74cmを測る。

覆土：覆土は暗褐色土を基調とし、炭化物を若干含むが焼土は含まない。しまりがやや弱い。

検出状況・所見：確認調査時に褐色土層の面が広がり、SK02に隣接するように本遺構が検出された。調査の進行に従いビットとなった。

SP010

位置：A2グリッド

重複関係：なし

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられ、遺構の東側は調査区外に延びる。断面形状はロート状を呈し、やや曲がりながら底面は先細りする。長軸30cm×短軸不明×深さ90cmを測る。

覆土：1層が堆積する。覆土は暗褐色土を基調とし、炭化物を若干含むが焼土は含まない。しまりがやや弱い。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土層の面が広がり、調査の進行に従いビットとなった。

第3面の調査（第6・7図）

SP12

位置：A2グリッド

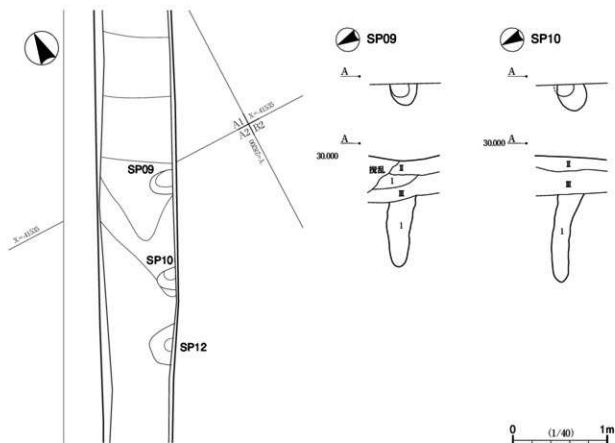
重複関係：なし

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられ、遺構の東側は調査区外に延びる。断面形状はU字状を

呈し、底面は若干先細りする。長軸42cm×短軸不明×深さ62cmを測る。

覆 土：2層が堆積する。覆土は暗褐色土を基調とし、焼土・炭化物を若干含む。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土層の面が広がり、住居跡と思われたが調査の進行に従いビットとなった。



第6図 第2面検出遺構

SP11

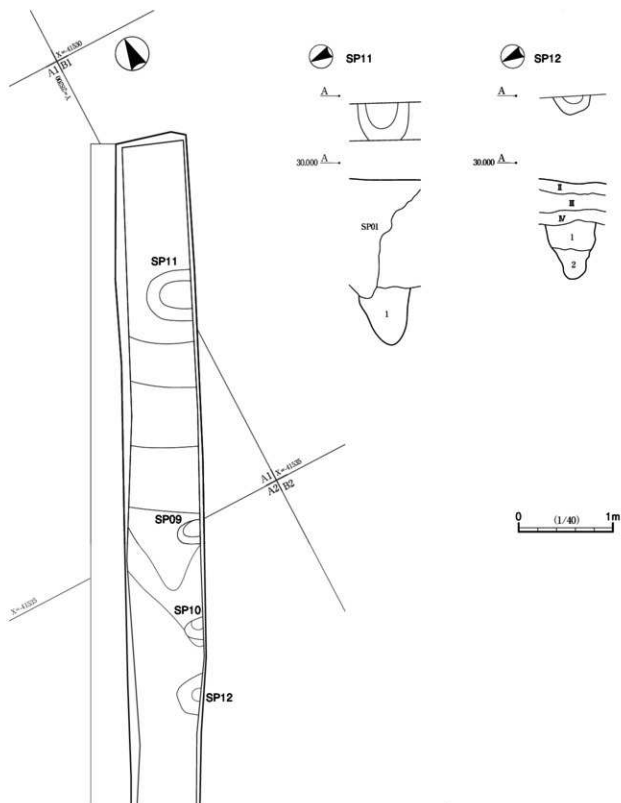
位 置：A1・B1グリッド

重複関係：SK01、SP01に切られる。

形状・規模：平面形は円形を呈すと考えられ、遺構は調査区外に延びる。上面はSK01に切られ、底部付近のみ遺存する。遺構構築面は不明。断面形状はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。長軸54cm×短軸不明×深さ60cmを測る。

覆 土：1層が堆積する。覆土は灰黄褐色土を基調とし、ロームブロックをやや多く含む。炭化物を若干含むが焼土は含まない。

検出状況・所見：確認調査時に暗褐色土層の面が広がり、住居跡と思われたが調査の進行に従いビットの重複となった。



第7図 第3面検出遺構

第3節 出土土器

調査区は座標を示すA1、A2、A3を基に面的に区分し、遺構の検出と遺物の取り上げを行っている。本調査は区分した面を徐々に掘り下げたことから、出土遺物を包含層A1、包含層A2、包含層A3として一括で取り上げている。遺構については全て一括で取り上げている。

出土遺物の帰属は確認調査埋戻土、精査、包含層A1、包含層A2、包含層A3、SK01、SK02、SK03である。深掘とは確認調査時に地山の確認を行った地点を示し（第3図）、精査は本調査開始時の遺構精査である。尚、魚類と貝類については第3章で報告する。

確認調査埋戻土（第8図1～4）

確認調査で深掘を行った箇所において、埋戻土の除去作業中に出土した遺物である。出土量は少なくとも4点を図示した。1と2は精製、3と4は粗製である。

1は浅鉢の体部片である。内湾し沈線で区画され磨り消し。地文は単節RL縄文である。後期中葉・後葉である。2は浅鉢の体部片である。内湾し沈線で区画され磨り消し。地文は単節RL縄文である。後期中葉・後葉である。3は深鉢の口縁部から胴部の破片である。直線的で端部は角頭状を呈する。紐線文は口縁部と胴部に巡る。条線はやや太く、幅の広い斜位である。先端部が丸みを持つ工具である。後期後葉である。4は深鉢の口縁部片である。やや内湾する。紐線文は厚みがなく、刻目が回り下端は平行線で区画される。条線は斜位である。安行1式である。

精査（第8図1～6）

本調査の遺構精査で出土した遺物である。出土量は少なくとも6点を図示した。1～3は精製、4～6は粗製である。

1は深鉢の口縁部片である。端部は角頭状を呈し、側面に磨り消し部（三条の沈線）を挟み上下二段の刻目が巡る。下段の刻目下には縄文帯を区画する沈線が巡る。地文は単節RL縄文である。曾谷式である。2は深鉢の胴部片である。角を用いた刺突文が平行に二列巡る。弧状沈線で区画され磨り消し。地文は単節RL縄文である。後期後葉である。3は深鉢の胴下半部片である。弧状沈線で区画され磨り消し。地文は単節RL縄文である。安行1・2式である。4は深鉢の胴部片である。紐線文は板状で薄く幅広で押捺され、上下に二条から三条の沈線が巡る。地文はなく斜位の条線である。施文はケズリ後に斜位の条線、紐線、上下の沈線である。後期後葉である。5は深鉢の胴部片である。紐線文は薄く刻目状に押捺される。上下は斜位の条線である。地文は単節縄文であろう。安行1式である。6は深鉢の口縁部片である。やや内湾する。紐線文は厚みがなく、刻目が回り下端は平行線で区画される。斜位の条線であり、地文はなくケズリである。安行1式である。

包含層A1出土土器（第8図1～9）

調査区北西側の約1/3の範囲になり、SK01の上層部分の覆土の大半である。出土量は少なくとも9点を図示した。1～4は精製、5～9は粗製である。

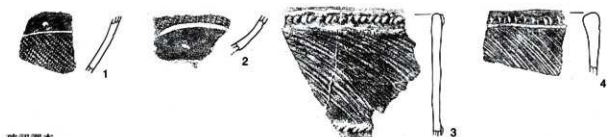
1は深鉢の胴部片である。地文は単節RL縄文であり、下位は磨り消しである。加曾利B式である。2は深鉢の口縁部片である。波状口縁であり側面に刻目が回り、平行線で区画される。地文は単節RL縄文である。加曾利B3式である。3は深鉢の胴部片である。括れ部は刺突文が回り、平行線で区画される。胴部は弧状沈線で区画され磨り消し。地文は不明である。後期後葉である。4は深鉢の口縁部片である。帯縄文は二段が残る。磨り消し後、平行線で区画される。地文は単節RL縄文である。安行1式である。5は深鉢の口縁部片である。紐線文は角頭状の口縁部に貼り付けられ押捺が巡る。口縁部近くから痕跡程度の低い紐線が貼り付けられ、三本の横位沈線がみられる。口縁部の内面は凹面状になる。地文は不明である。加曾利B2・3式である。6は深鉢の口縁部片である。紐線文は低く、棒状工具による押捺が巡るが不揃いである。条線はほぼ平行であり、地文は不明である。後期後

葉である。7は深鉢の胴部片である。紐線文は低く、刻目状に押捺される。胴部は斜位の条線であり、工具の端部は太く丸みをもつ。後期後葉である。8は深鉢の胴部片である。胴部はケズリ後粗いミガキ、更に二方向からの連弧状（斜横位？）の条線である。後期後葉である。9は深鉢の口縁部片である。口縁部に明瞭な紐線文はなく、素緑の口縁部に刻目状に押捺される。胴部はケズリ後に斜位の条線、更に刻目状の刺突文が巡る。安行1式である。

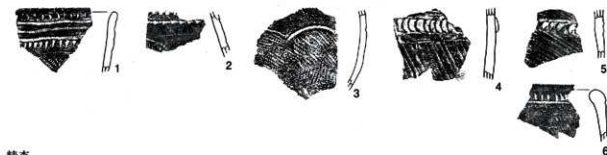
包含層A2出土土器（第9図1～25、第10図26～46）

調査区のはは中央になり、基本層序としたⅡ層からⅦ層までを一括で取り上げている為、出土量も多い。土器は後期前葉から後葉まで出土している。1～3は前葉の称名寺式と堀之内式である。4～32は精製、33～46は粗製である。

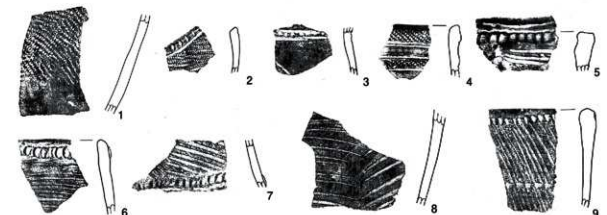
1は口縁部片である。口縁部はやや外反し、端面内側はやや凹面状になる。口縁部に平行線、胴部にはクランク状の平行線により、磨り消し部と縄文帯に区画される。地文は単節R1縄文である。称名寺式である。2は深鉢の口縁部片である。胴部は平行線で三角形に区画され、中央部に刺突された円形浮文に刻目が押捺された隆線文が交差している。堀之内1式である。3は深鉢の底部片である。



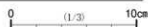
確認調査



精査

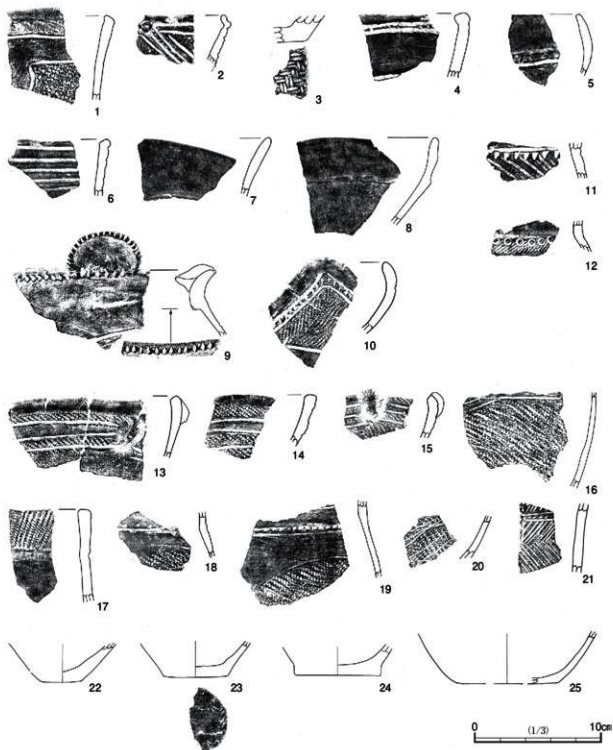


包含層A1



第8図 確認調査埋戻土・精査・包含層A1 出土土器

底部は厚く底部から胴部の立ち上がり部も非常に厚い。底部に網代痕。堀之内1式である。4は浅鉢の口縁部片である。口縁部はやや内湾し、端部は内側に折れ凹面状になる。口縁部は無文帯であり、沈線状の平行線が上端に二条と胴部との境に一条巡る。加曾利B2式である。5は浅鉢の口縁部片である。口縁部は内湾し、端部は角頭状を呈する。口縁部と体部の境は単節LRの帯縄文が沈線で区画され、下半は磨り消しされる。加曾利B2式である。6は深鉢の口縁部片である。外面は沈線状の横位平行線である。地文は不明である。加曾利B2式である。7は深鉢の口縁部片である。口縁部は波状を呈し、端部は丸みを持ち丁寧なミガキ。加曾利B2式である。8は浅鉢の口縁から体部片である。口縁部は内湾し、胴部はやや直線的に立ち上がる。口縁部の内外面と体部内面は丁寧なミガキ、体部外面は横ケズリされる。加曾利B2式である。9は深鉢の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し、端部には刻目が巡る。また、頸部内面にも刻目が巡る。口縁部の内側に半円状を呈する皿状の受け部が貼り付けられ、端部には刻目が巡る。加曾利B2式である。10は深鉢の波状口縁部片である。口縁部は内湾し端部は丸みを呈する。口縁部は磨り消し後、刻目状の刺突文を施文後、平行線により区画される。胴部は地文の縄文が磨り消され、沈線により区画される。地文は単節RL縄文である。加曾利B3式である。11は深鉢の頸部片である。頸部は平行線で区画され、胴部は括れ部に平行線と刺突文が巡る。下半は太い斜位の条線、地文は不明である。加曾利B3式である。12は深鉢の頸部片である。口縁部は磨り消し。胴部には竹管による刺突文が巡る。地文は単節LR縄文である。加曾利B式になろうか。13は深鉢の平口縁部片である。口縁部はやや内湾する。平行線により帯縄文と磨り消し部に区画される。縄文帯には弧状の瘤が貼り付けられる。地文は単節RLである。曾谷式である。14は深鉢の平口縁部片である。口縁部は角頭状を呈する。平行線により三段に区画され、帯縄文と磨り消し部分に分かれる。地文は単節RL縄文である。曾谷式である。15は深鉢の口縁部片である。頂部は低く端部は鋭角となる。口縁部の縄文帯に弧状の貼り付け文。平行線により三段に区画され、帯縄文と磨り消し部分に分かれる。地文は単節RL縄文である。曾谷式である。16は深鉢の胴部片である。平行線で区画され、胴部上半部は磨り消しされる。下半は地文の縄文帯である。地文は単節RL縄文である。後期中葉・後葉である。17は深鉢の口縁部片である。太い平行線により区画され、地文の単節LR縄文を残し、胴部を磨り消しされる。後期中葉・後葉である。18は深鉢の胴部片である。頸部は僅かに外反し、胴部は疎らな刺突文と平行線で区画される。胴部は弧線により磨り消し部と縄文帯に区画される。地文は単節RL縄文である。曾谷・安行1式である。19は深鉢の胴部片である。頸部は僅かに外反し、胴部はやや丸みを持つ。上半部は括れ部で二条の平行線で区画され、刺突文と磨り消し部となる。胴部は弧線により、磨り消し部とに区画される。地文は単節RL縄文である。曾谷・安行1式である。20は浅鉢の胴部片である。交差する平行線がみられ、地文は単節RL縄文である。加曾利B2式である。21は深鉢の胴部片である。矢羽根状の条線後、横位に平行線によりスリット状に区画される。安行1・2式である。22は深鉢の底部片である。胴部外面は磨り消し。底径は3.5cmと小さい。後期中・後葉である。23は深鉢の底部片である。胴部外面は磨り消し（ミガキ）。地文は単節RL縄文である。後期中・後葉である。24は深鉢の底部片である。胴部外面は横位のヘラケズリである。後期中・後葉である。25は深鉢の底部片である。胴部外面ヘラケズリ後ミガキ。底径から丸みを持ち立ち上がる。後期中・後葉である。26は深鉢の波状口縁部片である。頂部は板状になり穿孔される。瘤は頂部付近から三か所が残る。帯縄文は平行線により縄文帯と磨り消し部に区画される。地文は単節RL縄文である。安行1式である。27は台付鉢の台部片である。台部は大きく内湾し、下位の帯縄文は平行線で三段の縄文帯と磨り消し部に区画される。地文は単節RL縄文である。安行1式である。28は深鉢の平口縁部片である。口縁部はやや内湾する。二段の帯縄文は磨り消し後、平行線により帯縄文と磨り消し部に区画される。縄文帯には弧状の瘤が貼り付けられる。地文は単節RL縄文である。



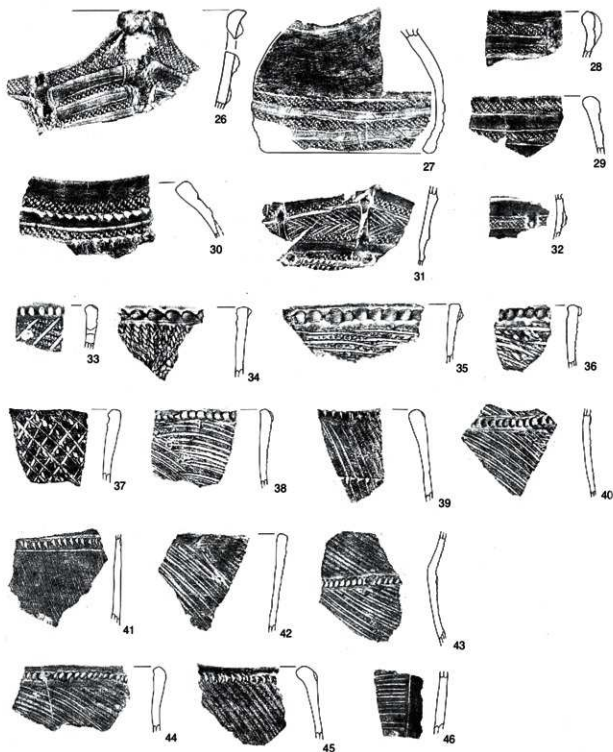
第9図 包含層A2 出土土器(1)

安行1式である。29は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや内湾する。縄文帯は平行線により二段に区画され、帯縄文と磨り消し部に分かれる。地文は単節RL縄文である。安行1式である。30は深鉢の口縁部片である。口縁部は大きく内湾する。縄文帯は平行線により二段の縄文帯と磨り消し部に区画される。縄文帯の下端には刺突文が巡る。地文は単節RL縄文である。安行1式である。31は深鉢の波状口縁部片である。口縁部は端部が欠損している。瘤は低い山形を呈し、三段が確認できる。縄文帯は三段で、口縁部近くの縄文帯は下位を平行線により区画される。下位の矢羽根状の条線帯は下

位を縄文帯で区画され、磨り消し帯が続く。三段の縄文帯は単節 R L 縄文である。安行 1 式である。32は浅鉢の胴部片か。胴部は内湾し丸みを持つ。平行線により縄文帯と磨り消し部の三段に区画され、縄文帯には押捺された小さな瘤が貼り付けられる。縄文帯は単節 R L 縄文である。安行 1 式である。33は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや内湾し、端部は押捺される。口縁部には焼成後に径 3mm の小孔が両側から穿たれる。胴部は平行線状の条線であり、地文は単節 R L 縄文である。加曾利 B 1 式である。34は深鉢の口縁部片である。口縁部の内面は沈線状に凹面となる。紐線文は丁寧に押捺され、端部はシャープである。地文は単節 L R 縄文の縦回転である。加曾利 B 1 式である。35は深鉢の口縁部片である。端部は角頭状を呈する。紐線文は低く、押捺は雑である。胴部は平行線状の横位の条線である。地文は単節 R L 縄文である。加曾利 B 2・3 式である。36は深鉢の口縁部片である。端部は角頭状を呈する。紐線文は低く、押捺される。胴部は斜横位の条線である。地文は単節 L R 縄文である。加曾利 B 2・3 式である。37は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや外反し、内面は沈線状の凹面となる。胴部は二方向からの条線が交差した斜格子状となる。地文は単節 R L 縄文である。加曾利 B 3 式である。38は深鉢の口縁部片である。紐線文は低く、押捺される。胴部は連弧状の斜位の条線である。地文は不明である。後期後葉である。39は深鉢の口縁部片である。口縁部に明瞭な紐線文はなく、素縁の口縁部に刻目状に押捺される。胴部はケズリ後に斜位の条線、更に刻目状の刺突文が巡る。曾谷式である。40は深鉢の胴部片である。胴部は斜位の条線後、括れ部に押捺された紐線文が巡る。紐線文は薄く丁寧に押捺され、雑な平行線で上下が区画される。後期後葉である。41は深鉢の胴部片である。胴部は斜位の条線後に刻目が巡り、上下が平行線で区画される。地文はなくケズリか。後期後葉である。42は深鉢の口縁部片である。口縁端部は横ケズリ後、胴部は斜位の条線である。後期後葉である。43は深鉢の胴部片である。胴部は斜位の条線後、括れ部に刻目状に押捺された紐線文が巡る。薄手の丁寧な作りである。後期後葉である。44は深鉢の口縁部片である。紐線文は不明瞭で刻目状に押捺される。胴部は斜位の条線である。地文は不明である。安行 1 式である。45は深鉢の口縁部片である。口縁端部は内湾し、端部は内側に凸状になる。紐線文は低く爪形状の刻目である。胴部は丁寧な斜位の条線である。先端が丸みを持つ工具か。地文は不明である。安行 1 式である。46は深鉢の胴部片である。横位の条線後、スリット状の平行線で区画し、磨り消しされる。安行 2 式である。包含層 A 3 出土土器 (第 11・12 図)

1 と 2 は後期前葉の深鉢である。3 から 38 は後期中葉から後葉であり、3 から 26 は精製、27 から 38 は粗製である。

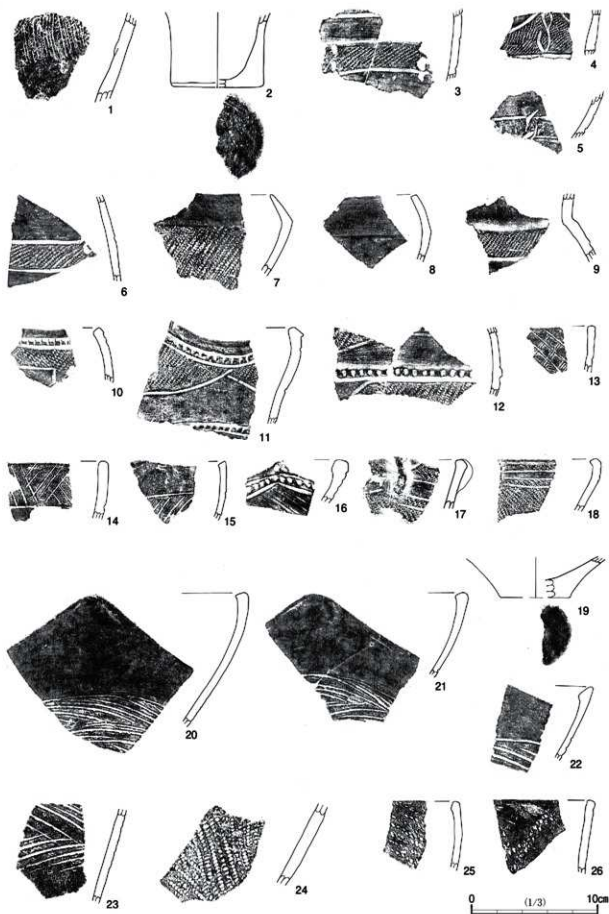
1 は深鉢である。胴部は厚く、外面は縦位の条線である。堀之内 1 式である。2 は深鉢の底部から胴部片である。底部は直線的に立ち上がり、円筒状を呈する。堀之内 2 式である。3 は深鉢の胴部片である。平行線により縄文帯と磨り消し部に区画される。縄文帯には不整形の刺突文が三個一対で二列が縦位で施文される。地文は単節 L R 縄文である。加曾利 B 1 式である。4 は深鉢の胴部片である。平行線と弧状線により縄文帯と磨り消し部に区画される。縄文帯は S 字状 (蛇行) 沈線の垂下文により区画される。地文は単節 L R 縄文である。加曾利 B 2 式である。5 は深鉢の胴部片である。平行線により無文部と磨り消し部に区画される。無文部には雑な S 字状 (蛇行) 沈線の垂下文により区画される。地文はなく雑な磨り消しである。加曾利 B 2 式である。6 は深鉢の胴部片である。平行線により縄文帯と磨り消し部に区画され、縄文帯には不整形の刺突文が施文される。地文は単節 L R 縄文である。7 は浅鉢の口縁部片である。口縁部は内湾し、胴部は弧状を呈し丸みを持つ。胴部は単節 L R 縄文である。加曾利 B 2 式である。8 は浅鉢の口縁部片である。口縁部は内湾し、上端部はケズリにより平坦であるが、凹面と凸面が見られる。胴部はケズリ後ミガキ。地文は不明である。加曾利 B 2 式である。9 は深鉢の頸部片である。頸部はやや外傾気味に立ち上がる。平行線により縄文帯と



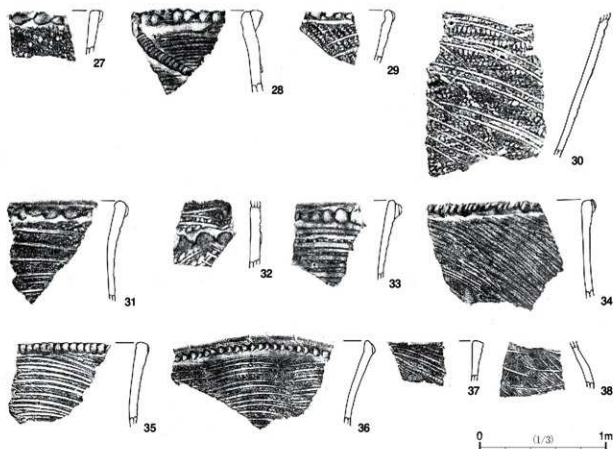
第10図 包含層 A2 出土土器 (2)

磨り消し部に区画される。地文は単節 L R 縄文である。加曽利 B 式である。10は深鉢の口縁部片である。口縁部は素縁であり、やや内湾する。平行線の上に刻目状の刺突文が巡る。沈線により鍵型に区画され、縄文帯と磨り消し部に分かれる。地文は単節 L R 縄文である。加曽利 B 3 式である。11は深鉢の口縁部片である。口縁部は波状を呈し、外反しながら立ち上がり口縁部は内湾する。口縁部は刺突文を平行線で区画し、更に弧状線により、縄文帯と磨り消し部に区画される。頸部は刺突文が巡り、平

行線により区画される。加曾利B 3式である。12は深鉢の胴部片である。胴部中位の紐線文は押捺され、平行線により区画される。また、胴部上半部と下半部は弧状線により縄文帯と磨り消し部に区画される。地文は単節R L縄文である。加曾利B式である。13は深鉢の口縁部片である。口縁部は角頭状を呈する。胴部は斜格子状の条線である。加曾利B 1式である。14は深鉢の口縁部片である。口縁部は素縁であり、平行線で区画され、上半は鋸歯状に施文される。下位は磨り消しされる。加曾利B 2式である。15は浅鉢の口縁部片である。口縁端部は面取りされ平坦となり、やや波状を呈する。平行線で区画され、上半は磨り消し、下半は斜位の条線である。加曾利B 2式である。16は深鉢の口縁部片である。口縁部片は波状を呈し、上端部は面取り状で平坦である。口縁部は竹管による刺突文が巡り、平行線で区画される。胴部は先端が平坦な工具による条線である。加曾利B 3式である。17は深鉢の口縁部片である。口縁部は平口縁でやや開き、半円状の瘤が貼り付けられる。口縁部の帯縄文は平行線により磨り消し部と区画され、下位の帯縄文は平行線と押し引きにより更に区画される。地文は単節R L縄文である。曾谷式である。18は浅鉢の口縁部片である。口縁部は平口縁で内湾し、内側端部はやや角をもつ。平行線により磨り消し部を挟み、二段の縄文帯に区画される。地文は単節R L縄文である。曾谷式である。19は深鉢の底部片である。胴部は底部から括れをもち立ち上がり、大きく外反する。後期中・後葉である。20は深鉢の波状口縁部片である。胴部は矢羽根状の条線が施文される。加曾利B 2式である。20は確認調査、21は本調査で出土している。接合はしないが胎土等から同一個体と考えられる。22は深鉢の波状口縁部片である。口縁部の形状から頂部より下の部位である。胴部は矢羽根状の条線が施文される。加曾利B 2式である。23は深鉢の波状口縁の胴部片である。胴部は矢羽根状の条線が施文される。加曾利B 2式である。24は深鉢の胴部片である。地文は単節R L縄文である。加曾利B式である。25は深鉢の口縁部片である。素縁で内面に沈線状の凹面が巡る。地文は単節R L縄文である。ケズリ→施文→一部を磨り消しか。加曾利B式である。26は深鉢の口縁部片である。素縁で口縁は角頭状で上端は面取りされ平坦である。地文は単節R L縄文である。加曾利B式である。27は深鉢の口縁部片である。紐線文は幅広く押捺され、端部は明瞭な稜線となる。条線はなく地文は単節R L縄文である。加曾利B 1式である。28は深鉢の口縁部片である。口縁部の紐線文は厚く、三角形状を呈する。押捺は不規則である。口縁部から胴部に向かい、細かく押捺された板状の紐線文が垂下している。胴部は横位の条線である。地文は不明である。加曾利B 2式である。29は深鉢の口縁部片である。口縁部の内面は沈線状の凹面が巡る。紐線文は丸みを持ち、押捺は不規則である。胴部の条線は交差する平行線である。地文は単節R L縄文である。加曾利B 2式である。30は深鉢の胴部片である。胴部の地文は単節R L縄文であり、条線は二本一組で交差する斜位の条線である。加曾利B 2式である。31は深鉢の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反する。紐線文の押捺は明瞭である。胴部は三本で一組となる横位の条線であり、ほぼ等間隔である。地文は単節R L縄文か。加曾利B 2式である。32は深鉢の胴部片である。直線的で内面に沈線が巡る。紐線文は幅広く、押捺の凹凸は明瞭である。条線は間隔が広い平行線と斜位の条線である。地文は単節R L縄文である。加曾利B 2式である。33は深鉢の口縁部片である。紐線文は幅が広く押捺は不規則である。口縁部から胴部は横位の条線である。地文の節は不明だが単節縄文であろう。後期後葉である。34は深鉢の口縁部片である。紐線文は上半部に刻目状に押捺される。口縁部から胴部は斜位の条線である。地文は不明である。後期後葉である。35は深鉢の口縁部片である。紐線文は丁寧に押捺される。口縁部から胴部は斜横位の条線である。地文は不明でケズリが残る。後期後葉である。36は深鉢の口縁部片である。紐線文は丁寧に押捺される。口縁部から胴部は横位の連弧状の条線である。地文は不明である。後期後葉である。37は深鉢の口縁部片である。口縁部は素縁で角頭状となる。胴部は斜位の条線であり、幅が広く角のある工具か。地文は不明である。後期後葉である。38は小型鉢の胴部片か。胴部は規則性



第11圖 包含層A3 出土土器(1)



第12図 包含層A3 出土土器(2)

のない斜横位の条線である。後期後葉か。

SK01出土土器(第13・14図)

1～8は後期中葉～後葉の精製、9～21は後期後葉の安行1・2式期の精製である。22～35は後期後葉の粗製で安行1・2式が中心である。

1は深鉢の口縁片である。素縁で口縁部はケズリ後、一条の太い平行線が巡る。地文は単節LR縄文である。2は浅鉢の体部である。上半に凹部をもち上半は大きく外に開く。体部上半は縦位の二本の平行線と一本の横位の平行線でスリット状に区画され、スリット部分を磨り消す。地文は単節LR縄文。加曽利B式である。3は深鉢の胴部片である。胴部上半か。縄文帯は平行線で三段に区画され、半円状の沈線が垂下して縄文帯は縦位に区画される。地文はRL縄文か。加曽利B2式である。4は浅鉢の口縁部片である。口縁部は内湾し端部は外に折れる。端部下には刻目が巡り、平行線で区画される。胴部は単節RL縄文であり、半裁竹管状の平行線が一部残る。地文は単節RL縄文である。加曽利B3式である。5は深鉢の口縁部片である。口縁部は内面に沈線状の凹面が巡る。横位ケズリ後、文様帯は下端を平行線で区画された斜格子である。加曽利B3式である。6は深鉢の胴部片である。頸部は二条の平行線で区画され、磨り消し。胴部は斜格子状の条線であり、地文は単節RL縄文である。加曽利B3式である。7は深鉢の底部片である。胴部下端と底部の外縁はケズリである。加曽利B式である。8は深鉢の底部片である。胴部下端と底部の外縁はケズリ後ミガキである。加曽利B式である。9は深鉢の波状口縁部である。口縁部はケズリ後施文される。帯縄文は二段確認できるが、頂部からの瘤が三か所と帯縄文が二段残る。磨り消し部はケズリにより凹面となり、平行線で区画される。安行1式である。10は深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾し、帯縄文は磨り消し部を挟み二段巡る。

帯縄文は単節 R L 縄文である。下端には押し引きの刺突文と平行線で磨り消し部が区画される。下段の帯縄文は幅が狭く、下端は押し引きの刺突文で区画される。胴部はたすき状の沈線により、縄文帯と磨り消し部に区画される。地文は単節 R L 縄文である。安行 1 式である。11 は深鉢の胴部片である。押し引き状の刻目は二本の平行線で区画される。胴部は沈線により半円状に区画され、地文を残す縄文部と磨り消し部となる。地文は単節 L R 縄文である。安行 1 式である。12 は浅鉢の胴部片である。刺突状の刻目を施文後、上端のみ平行線で区画される。胴部は二本の斜位平行線により縄文部と磨り消し部に区画される。地文は単節 L R 縄文である。安行 1 式である。13 は深鉢の口縁から頸部片である。口縁部に丸みを持つ山形の瘤が貼り付けられている。文様構成は口縁部から刻目、磨り消しとなり下段の刻目は平行線により区画される。入り組み文の交差する刻目に接して、厚さ 1.5mm で長さ 7mm の瘤が貼り付けられる。瘤付土器第 3 段階である。14 は深鉢の胴部片である。平行線と弧線で区画され磨り消しされる。瘤は楕円形で厚さ 1.5mm、長さ 6mm で二個一対が貼付けられる。瘤付土器第 3 段階である。15 は深鉢の口縁部から胴部片である。所謂、瘤付土器である。上半部の文様構成は口縁部から刻目二段、入り組み文二段（二列）、刻目二段（二列）と括れ部に二個一対の瘤の順で文様帯を構成している。瘤は不整形で厚さ 3mm、長さ 9mm であり、括れ部に貼り付けられている。下半は入り組み文一段（一列）で構成されている。入り組み文の地文は単節 L R である。瘤付土器第 3 段階である。16 は浅鉢の胴部片である。所謂、瘤付土器である。胴部中位に刻目と平行線により区画される。刻目の上には不整形楕円形で厚さ 2mm、長さ 8mm の瘤が二個貼付けられる。地文はケズリと磨きで不明である。瘤付土器第 3 段階である。17 は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや外反する。平口縁で上端に半円状の瘤が貼り付けられる。口縁部部の帯縄文は沈線で頸部と区画される。木の葉状の帯縄文は三段と磨り消し部の四段は交互に区画され、文様間は S 字状沈線が垂下し縦位に区画される。地文は単節 R L 縄文である。安行 2 式である。18 は深鉢の口縁部片である。口縁部の上端、口縁部側面、低い隆帯（隆線文状）に瘤が貼り付けられている。上端の瘤は三角形を呈し、口縁部側面と隆線部は二か所が押捺された豚の鼻状を呈している。低い隆帯（隆線文状）は刻目される。安行 2 式である。19 は口縁部片か。端部を欠損しているが、平行線で区画された刻目を持つ隆線文が巡り、豚の鼻状の瘤が二個一対で貼り付けられる。胴部は横位の条線である。安行 2 式である。20 は深鉢の胴部片である。上端部に沈線による凹凸面が残る。胴部は弧状の沈線により区画され、上半部は磨り消しされる。地文は単節 R L 縄文である。安行 1・2 式である。21 は深鉢の胴部片である。平行線で区画され、上部は斜位ケズリ後、磨り消しされる。地文は単節 R L 縄文である。安行 1・2 式である。22 は深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾する。紐線文は三角形に張り出し押捺される。胴部の地文は単節 L R 縄文である。加曽利 B 1 式である。23 は深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾する。紐線文は幅広く丁字に押捺される。胴部は斜位の条線である。地文は単節 L R 縄文である。加曽利 B 1 式である。24 は深鉢の口縁部片である。口縁部は直線的でやや外反する。紐線文は幅が広く、押捺は浅いが丁字である。胴部は斜位の条線である。地文は単節 R L 縄文である。後期後葉である。25 は深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾する。紐線文は薄いが幅広く、丁字に押捺される。胴部は斜位の条線である。地文は不明で斜位のケズリ。後期後葉である。26 は深鉢の口縁部片である。口縁部は内傾する。紐線文は薄く、丸棒状工具により丁字に押捺される。胴部は斜位の条線と太い沈線状の条線である。地文は不明である。後期後葉である。27 は深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾する。紐線文は幅広く、明瞭に押捺される。胴部はケズリ後斜位の条線である。地文は不明である。後期後葉である。28 は深鉢の口縁部片である。口縁部はほぼ直線的である。紐線文は幅が狭く薄いが押捺は明瞭である。胴部は斜位のケズリ後、斜位の条線である。地文は不明である。後期後葉である。29 は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや内湾する。紐線文は薄く板状であり、押捺は浅いが丁字である。胴部は斜横位のケズリ後、

ミガキ状の条線である。地文は不明である。後期後葉である。30は深鉢の口縁部片である。口縁部は外反する素緑の口縁部であり、紐線文はなく側面に刻目と一条の平行線が巡る。胴部はケズリ後ミガキ、更に斜位の条線である。地文は不明である。曾谷・安行1式である。31は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや内湾し、素緑で厚手の口縁部である。紐線文はなく下端に角状工具による押し引き文が巡る。条線は細く疎らで直線的な斜位の条線である。V状の条線が口縁部下に一条巡る。地文は不明である。安行1式である。32は深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾する。紐線文はなく、刺突文と平行線で区画された文様帯がみられる。地文は不明瞭で斜位ケズリ後、横位の条線である。安行1式である。33は深鉢の胴部片である。紐線文はなく、押し引き文は二条の平行線で区画される。ケズリ後、斜位の条線である。曾谷・安行1式である。34は深鉢の胴部片である。紐線文はなく、刻目と一条の平行線で区画される。ケズリ後、斜位の条線である。安行2式である。35は深鉢の胴部片である。紐線文は、丁寧な押捺が巡る。胴部上半は条線によりスリット状に区画され、中央部に斜位の条線部分を残し、両側は磨り消しである。下半は斜位の条線である。地文は不明である。安行2式である。

SK02出土土器（第14図）

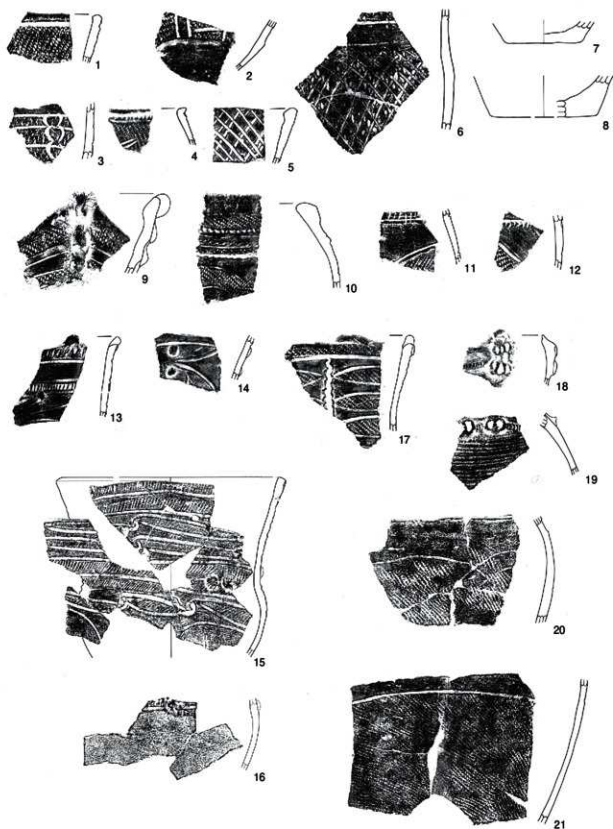
1～5は後期後葉である。1と5は粗製、2～4は精製である。

1は深鉢の口縁部片であり、口縁端部はやや角頭状を呈する。紐線文は薄く幅広く、押捺は不揃いである。地文は横ケズリ後、まばらな条線である。後期後葉である。2は深鉢の波状口縁部片である。帯縄文は単節RL縄文である。ケズリにより区画され三段が確認できるが、本来は四段であろう。また、ケズリ後にミガキで二条の平行線が施文される。瘤は低い山形である。安行1式である。3は深鉢の口縁部片であろう。上部が欠損し不明な点が多い。帯縄文の上部は横ミガキされ、下端は角状の刺突文が巡り、下半はケズリ後ミガキである。帯縄文は単節RL縄文である。安行1式である。4は深鉢の口縁部片である。二段の紐線文は細かな刻目が巡る。紐線文は細いが丁寧な作りである。平行線で区画された紐線文間はケズリ後ミガキである。安行2式である。5は深鉢の口縁部片である。明瞭な紐線文はなく、刻目が巡り下端に平行線が一条巡る。地文は斜位の条線である。安行1式である。

SK03出土土器（第14図）

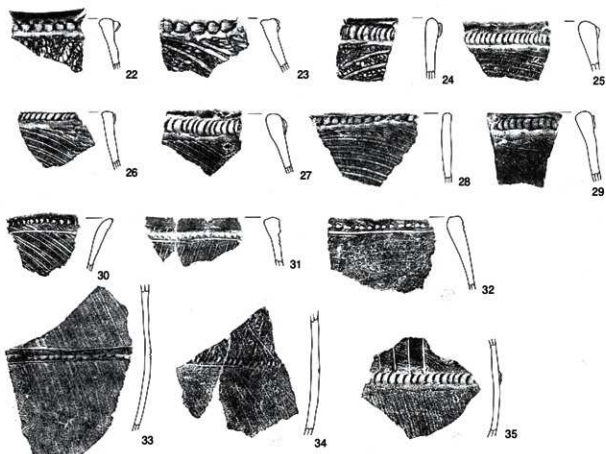
1～9は後期中葉～後葉である。1と2は粗製、3～9は精製である。

1は口縁部片である。紐線文は低く、押捺は丁寧で明瞭である。胴部は横ケズリ後、斜位の条線である。後期後葉である。2は口縁部片である。紐線文は板状で押捺は明瞭である。胴部は斜位の条線であり、地文は単節RL縄文である。後期後葉である。3は口縁部片であり内湾する。帯縄文は単節RL縄文である。二段が巡る。ケズリと平行線により区画された部分はミガキである。地文は単節RL縄文である。安行1式である。4は口縁部片であり内湾する。帯縄文は単節RL縄文である。一段が巡る。口縁部の下端は平行線と角状の押し引きの刺突文が巡る。地文は単節RL縄文である。安行1式である。5は胴部片である。三条の平行線で区画される。縄文帯は上下に磨り消し部に挟まれ、文様帯は四段となる。縄文帯は単節RL縄文である。地文も単節RL縄文である。加曾利B2式である。6は底部片である。底部は厚手で、外反気味に立ち上がる。加曾利B式である。7は胴部片である。二条の平行線で上半の磨り消し部、下半の押し引き三角文に区画される。地文は不明である。安行1式である。8は口縁部片であり内湾する。帯縄文は単節LR縄文である。帯縄文は平行線で区画され、一段目は厚く、二段目は薄くなる。二段目の下端は平行線で区画され、磨り消しである。地文は単節LR縄文である。安行2式である。9は口縁部片である。帯縄文は単節RL縄文である。一段目はケズリで区画され磨り消し部となり、下位に平行線が巡るが、平行線部分から欠落している。地文は単節RL縄文である。安行2式である。



0 (1/3) 10cm

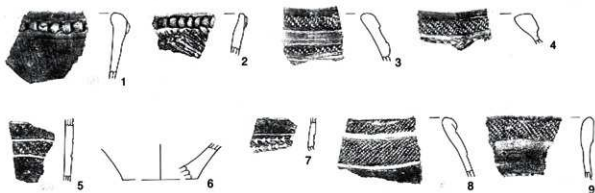
第13图 SK01 出土土器 (1)



SK01 (2)



SK02



SK03

0 (1/3) 10cm

第14図 SK01 出土土器 (2), SK02, SK03 出土土器

第3章 動物遺体の分析

1. 概要

当遺跡では、平成16年度と令和4年度に試掘・立ち合い等で貝サンプルを採取しているが未報告である。当遺跡はきわめて著名な貝塚の一つだが、動物遺体の詳細な記載は今回が初めてである。貝類を含む遺構は6遺構（SK02・03、SP04・06・07・08）あり、このうち土坑1基（SK03）、ピット1基（SP07）の2遺構において、貝層の全量85.7リットルをサンプルとして採取。5mm・2.5mm・1mmメッシュのフルイで水洗選別し、全量を分析・保管対象とした。動物骨はほかに現地採取資料がある。資料の年代を絞る情報は乏しいが、調査区全体で加曽利B2式から後期安行式が主体を占める。概ねこの時期の資料であろう。なお、分析は貝類を西野雅人が、魚類・哺乳類は服部智至が行った。

SK03（IHR5-3） 覆土全体に混土貝層が堆積していた。貝殻は層状をなしておらず、貝と土が混じったものを投棄したものであろう。後期中葉～後期後葉安行1・2式の土器が混在しており、時期は後期後葉頃と推定される。サンプルは遺構の上部より厚さを三分し、上層・中層・下層として各々採取した計66.0リットルである。

SP07（IHR5-5） 性格不明のピットの上部に混貝土層が堆積していた。サンプルは遺構の上部より厚さを三分し、上層・中層・下層として各々採取した計19.7リットルである。

2. 貝類

17分類群 3,502個体を検出した。カット間の差が小さいため（第2表）、分析はサンプル合計で行うが、SK03ではハマグリサイズの变化が認められたため、カットごとのデータを示した。

貝種組成 2遺構ともイボキサゴとハマグリが9割を占め、オキアサリ、シオフキ、アサリが比較的多く、他は少ない。いずれも内湾砂泥底に生息するものである。そのほか淡水産のカワナナがごくわずかに混じる以外、海産種で占められている。SK03はハマグリが最多であり、SP07はイボキサゴが圧倒的に多い。

第1表 貝種同定結果

種名	SK03			SP07			合計
イボキサゴ	219	217	494	101	422	449	1902
カワナナ	3						3
ウミナナ科	4	3	8	4	7		26
ツメタガイ			2	2			4
アカニシ						1	1
アラムシロ	1		5	2	2		10
フネガイ科						1	1
マガキ	1	1	3	3			8
イシガイ科			1				1
シオフキ	11	23	42	2	11	4	93
マテガイ	12		4		1		17
ハマグリ	627	335	161	38	85	30	1276
アサリ	10	3	11	2	4	4	34
オキアサリ	31	24	26	8	15	10	114
カガミガイ	1		2				3
オキシジミ	1	1	2	3	1		8
オオノガイ	1						1
合計	922	607	761	151	552	509	3502
水洗前体積(ℓ)	23.6	20.4	22.0	3.3	6.5	9.9	85.7
微小貝	329	591	575	24	363	332	2214

第2表 貝種組成

種名	SK03	SP07	合計	%
イボキサゴ	930	972	1902	54.3%
ハマグリ	1123	153	1276	36.4%
オキアサリ	81	33	114	3.3%
シオフキ	76	17	93	2.7%
アサリ	24	10	34	1.0%
ウミナナ科	15	11	26	0.7%
マテガイ	16	1	17	0.5%
アラムシロ	6	4	10	0.3%
マガキ	5	3	8	0.2%
オキシジミ	4	4	8	0.2%
ツメタガイ	2	2	4	0.1%
カワナナ	3		3	0.1%
カガミガイ	3		3	0.1%
アカニシ		1	1	0.0%
フネガイ科		1	1	0.0%
イシガイ科	1		1	0.0%
オオノガイ	1		1	0.0%
合計	2290	1212	3502	100.0%

計測値 二枚貝4種の計測を行った。いずれも後期の標準的なサイズといえる。SK03のハマグリは上に向けて小型化がみられる。詳細な考察は今後の課題としたい。

第3表 貝類計測値分布

イボキサゴ殻径			ハマグリ殻長			シオフキ殻長			オキアサリ殻長		
mm	SK03	SP07	mm	SK03	SP07	mm	SK03	mm	SK03	mm	SK03
-8.0			-20.0			-20.0		-20.0		-20.0	
-10.0			-25.0	2		-25.0		-25.0	2	-25.0	2
-12.0	5	7	-30.0	45	17	-30.0	2	-30.0	26	-30.0	26
-14.0	45	39	-35.0	73	39	-35.0	3	-35.0	37	-35.0	37
-16.0	85	44	-40.0	60	27	-40.0	15	-40.0	13	-40.0	13
-18.0	49	21	-45.0	14	17	-45.0	29	-45.0	3	-45.0	3
-20.0	3	3	-50.0	4	5	-50.0	9	-50.0		-50.0	
-22.0	1	1	-55.0	2	3	-55.0	2	-55.0		-55.0	
-24.0			-60.0			-60.0		-60.0		-60.0	
-26.0			-65.0		2	-65.0		-65.0		-65.0	
-28.0			-70.0			-70.0		-70.0		-70.0	
-30.0			-75.0		1	-75.0		-75.0		-75.0	
試料数	188	115	試料数	200	111	72	17	試料数	60	試料数	81
平均	15.09	14.66	平均	34.02	36.46	38.02	44.30647059	平均	41.81	平均	31.62
標準偏差	1.58	1.85	標準偏差	4.97	7.59	7.38	9.848473829	標準偏差	4.81	標準偏差	4.13

3. 魚類

(1) 資料と分析方法

SK03およびSP07の貝サンプル検出資料の全量を分析対象とした。同定対象とした部位は、前上顎骨、主上顎骨、歯骨、角骨、方骨、舌顎骨、主鰓蓋骨、基後頭骨、椎骨（第1椎骨以下を含む腹椎・尾椎・尾部棒状骨）を必須部位とし、分類群の骨格的特徴に応じてその他の部位も適宜同定対象に加えた。遺存状態が良好であるにも関わらず同定に至らなかった資料については「真骨類（未同定）」として記載・集計した。同定は原則として現生標本との比較によって行った。比較に用いた標本は千葉市所蔵の現生標本である。なお、魚類以外では、シカ・イノシシ、ヘビ亜目などもみられたが、若干量であったためここでは割愛する。

(2) 分析結果

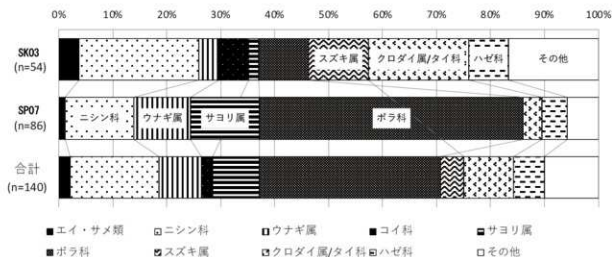
合計140点、軟骨魚綱（板鰐類）1分類群、硬骨魚綱14分類群が同定された（第4表）。1ℓあたりの同定標本数は1.6点（NISP/ℓ）である。魚種組成を2遺構の合計でみると、ボラ科が最も多く、これにニシン科が次ぎ、サヨリ属、ウナギ属、クロダイ属（タイ科含む）、ハゼ科、スズキ属が普通にみられる。東京湾東岸湾奥で一般的にみられる内湾性魚類を主体とした魚種組成を示すが、遺構間で組成及び構成種に差が認められたため、以下では遺構別に記載する。

SK03 合計54点、軟骨魚綱1分類群、硬骨魚綱13分類群が同定された。1ℓあたりの同定標本数は0.8点（NISP/ℓ）である。魚種組成では、ニシン科が最も多く、これにクロダイ属（タイ科含む）、スズキ属、ボラ科の順で次ぐが、いずれも卓越するものではなく、偏りが比較的小さいのが特徴である。また、SP07と比較して同定された分類群数（構成種）が多く、アジ科・サバ属などの表層回遊魚や淡水魚（コイ科）も僅かだが混じる。遺跡周辺の水域を広く利用し、雑多な魚種を得ている印象が強い。

第4表 魚類種名表

和名	学名
軟骨魚綱（板鰐類）	CHONDRICHTHYES (Elasmobranchii)
イタナメ属 イタナメ	<i>Galeocerdo cuvier</i>
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ニシン科	コノシロ <i>Konosirus punctatus</i> 属・種不明 <i>Chupeid</i> gen. et sp. indet.
ウナギ科	ウナギ属 <i>Anguilla</i> sp.
コイ科	属・種不明 <i>Cyprinidae</i> gen. et sp. indet.
サヨリ科	サヨリ属 <i>Hyporhamphus</i> sp.
ボラ科	属・種不明 <i>Macilidae</i> gen. et sp. indet.
スズキ科	スズキ属 <i>Lateolabrax</i> sp.
キス科	キス属 <i>Silago</i> sp.
アジ科	属・種不明 <i>Crangidae</i> gen. et sp. indet.
タイ科	クロダイ属 <i>Acanthopagrus</i> sp.
サバ科	サバ属 <i>Scomber</i> sp.
ハゼ科	属・種不明 <i>Gobiidae</i> gen. et sp. indet.
コナ科	属・種不明 <i>Platycephalus</i> gen. et sp. indet.
カレイ科	属・種不明 <i>Pleuronectidae</i> gen. et sp. indet.

SP07 合計86点、軟骨魚綱1分類群、硬骨魚綱8分類群が同定された。1ℓあたりの同定標本数は4.4点（NISP/ℓ）であり、SK03と比べてかなり多い。魚種組成では、ボラ科が全体の5割程度を占めて最も多く、これにニシン科・サヨリ属・ウナギ属の順で次ぐ。SK03と比べて特定の魚種に偏る傾向があり、アジ科やサバ属などの沿岸の表層を回遊する魚種がみられない。河口付近の汽水域で主に得られる魚種を利用している印象が強い。



第15図 魚種組成 (NISP)

第5表 魚類同定結果 (NISP)

遺体番号	SK03												SP07												総計								
cut	①			②			③			合計			①			②			③			合計			①		②		③				
メッシュ(mm)	5	25	1	計	5	25	1	計	5	25	1	計	5	25	1	計	5	25	1	計	5	25	1	計	5	25	1	計	5	25	1	計	
イササメ									1	1	1	1													1	1	1	1	2				
エイサメ類									1	1	1	1				1	1							1	1	1	1	2					
コブシロ																								1	1	1	1	2					
ニシン科		1	5	6			2	2		4	4	1	11	12		1	1		1	1		8	8		10	10		1	21	22			
ウナギ属							1	1		1	1		2	2							4	5	9	4	5	9		4	7	11			
コイ科							3	3		+	+		3	3																			
サヨリ属							1	1				1	1							2	5	7	3	1	4		5	6	11	6	6	12	
ボラ科							2	2		1	2	3	3	2	5				2	2		16	24	40		16	26	42		19	28	47	
スズキ属			1	1	1				1	4	4	1	4	1	6												1	4	1	6			
キス属									1	1	2		1	1	2																		
アジ科												1	1		1	1																	
クロダイ属	2			2	1				1	1														1			1	5					
アジ科	1	1	+	2		+	+	+	1	3	+	4	2	4	+	6		+	+	1	+	1	+	1	1	+	2	3	5	+	8		
サバ属							1	1		1	1		2	2																			
ハサメ							2	2		2	2		4	4					3	3		1	1			4	4						
コナ科									2		2	2			2														2				
ササ科							1	1																									
真骨類(未同定)			1	1			+	+	+	+	+	+	1	1							1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3		
魚類合計(同定不可)																								2	2		2	2		2			
魚類合計	3	2	7	12	2	4	9	15	4	11	12	27	9	17	28	54	1	1	2	1	2	15	1	25	43	69	3	27	56	86	12	44	84

※タイ科遊離歯、真骨類は「+」とし、集計値には含めていない。

第4章 まとめ

今回の調査によって、土坑3基とビット12基が確認された。11㎡という小面積の割には、所在した時期や形成された遺構の種類など大きな成果を上げることができた。

調査区内は土層堆積の特徴から大規模な削平が行われ、水平に堆積した土層からは人為的な盛土が行われたことが理解できる。この削平と盛土については、縄文時代中期から後期の後半まで継続した集落の造営に伴うもので、堅穴住居と土坑群等の遺構が環状に配置された可能性をもつ。特に貝塚を伴う遺跡では酒詰のいう内側の削平された低地と外側の顕著な盛土が集落の景観的な特徴となる。

検出された盛土はハードルーム上面に達する整地（削平）から始まり、表土（耕作土）としたI層、整地層としたII層からVI層が確認されている。遺構はこの整地層のIV層上面、V層上面で確認され、II層上面の第1面からはSK01からSK03の土坑3基と柱穴状のビットSP01からSP08、第2面からは柱穴状のビットのSP09とSP10、第3面からは柱穴状のビットのSP11・SP12、第4面からは明確な土坑やビットは検出されていない。

SK01は確認調査で堅穴状の遺構として確認されている（第3図）。本調査ではその範囲が広がり、検出された部分は土層断面を見る限りは規模が4mを超え、深さも105cmとなる。また、内部に堆積した6層が整地層のIV層の接点付近で角度を変え大きく開き、IV層からVI層の立ち上がりの角度と相違することから、新旧の遺構が重複しているようにも見え、VI層の下位を底面とした遺構とハードルームを底面とした遺構が重複している可能性が十分に考えられる。規模と形態からは土坑ではなく堅穴住居跡と捉えるべきであろうか。

土器類は包含層A2と包含層A3、土坑としたSK01から多く出土している。しかし、調査区は狭く5mの大グリッドの範囲内で層位的に取り上げざるを得なかった。包含層は後述する整地や盛土のためか、各時期の遺物が混在する状況にあって、土層の時期の特定には困難をきたした。また、出土した土器類から遺構の時期を特定するにも困難であった。包含層から出土した土器類はすべて一括で取り上げていることも一因するが、縄文時代の「盛土」や「整地」をする段階で新旧の遺物が混在する状況は十分想定されることであり、SK01のようにI層上面からVI層まで掘り込んでいる遺構は、埋没過程で全ての時期を包含してしまうと考えられる。

調査では後期前葉の称名寺式と堀之内式が僅かに出土しているが、主体となるのが後期中葉の加曽利B式から後葉の安行1・2式であることがわかったことは重要である。また、SK01から東北系の特徴を持つ幅付土器第3段階の深鉢が出土したことは注目される。

草刈場貝塚の調査歴をたどると昭和2年に酒詰伸男氏による調査が嚆矢となる。しかし報文を見てもその調査地点、その他の実態は不明であると言わざるを得ない。近年の報告事例として西野雅人の資料紹介がある。令和3年に今回の調査地点のすぐ南で工事が始まり貝層が破壊され、その際に出土した遺物を在地の歴史家が採集保管しており、その資料を紹介したものである。

西野による採集品の分類によれば、詳細不明土器を除き、239点中112点が中期後～後期初、これ以前が15点、後期初～後期中が111点、後期後半～晩期が1点となっている。図示された資料の大半を占めるのは、加曽利E式末から堀之内1式期のものである。採集地点の写真から純貝層部分に当たり、貝殻が一面に散っている。

以上のように、純貝層本体部は加曽利E式末から堀之内式が主体であり、本地点で加曽利B式から安行1・2式を検出したことから貝塚総体としての時期は中期末葉から後期後葉（末）までとされよう。

また、今回調査した後期後葉（末）の土器を出土した遺構ではSK01・02は貝層を伴っておらず、わずかにSK03で混土貝層が存在したにすぎないことから、後期末には貝層形成が衰退に向かってい

る可能性があるかもしれない。

引用・参考文献

- 『史跡 加曾利貝塚総括報告書』2017 千葉市教育委員会
- 『特別史跡 加曾利貝塚第14次調査報告書』2024 千葉市教育委員会 千葉市埋蔵文化財調査センター
西野雅人「平成29年度千葉市内主要貝塚資料分析報告」『貝塚博物館紀要』第49号 2023
- 『井野長割遺跡（第4次調査）』佐倉市井野東土地区画整理事業内埋蔵文化財調査
財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第205集 2004
- 『吉見台遺跡A地点』財団法人印旛郡市文化財センター第159集 林田利之 1999
- 『多古田低地遺跡』豊和埋蔵文化財調査業務 公益財団法人印旛郡市文化財センター第367集
匝瑳市・公益財団法人印旛郡市文化財センター 2020
- 『第14回縄文セミナー 後期後半の再検討』2001年2月
- 『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討』2002年2月

写真図版



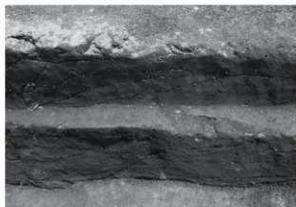
調査区 完掘全景（北西から）



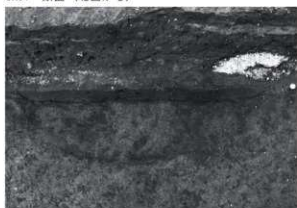
調査区 完掘全景（南東から）



SK01 断面（北西から）



SK01 断面（北西から）



SK02 完掘（南東から）



SK03 完掘（南東から）



SP01 断面（北西から）



SP03（左）SP02 断面（右）（北西から）

図版 2



SP04・05 断面 (北西から)



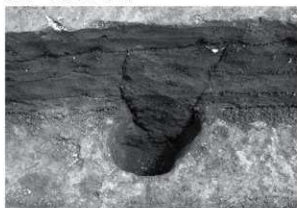
SP06 断面 (北西から)



SP07 断面 (北西から)



SP07 完掘 (北西から)



SP09 完掘 (北西から)



SP11 断面 (北西から)



SP11 断面 (北西から)



SP12 断面 (北西から)

図版3



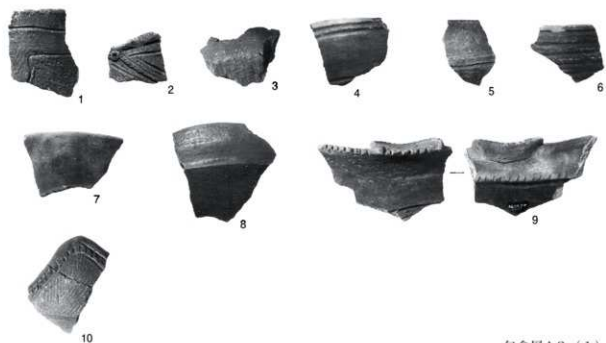
確認調査



精査



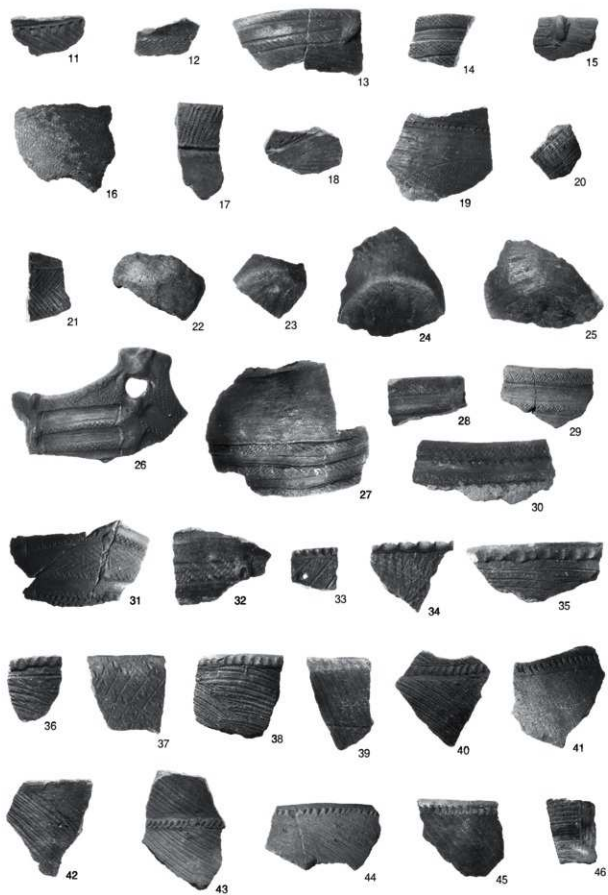
包含層A1



包含層A2 (1)

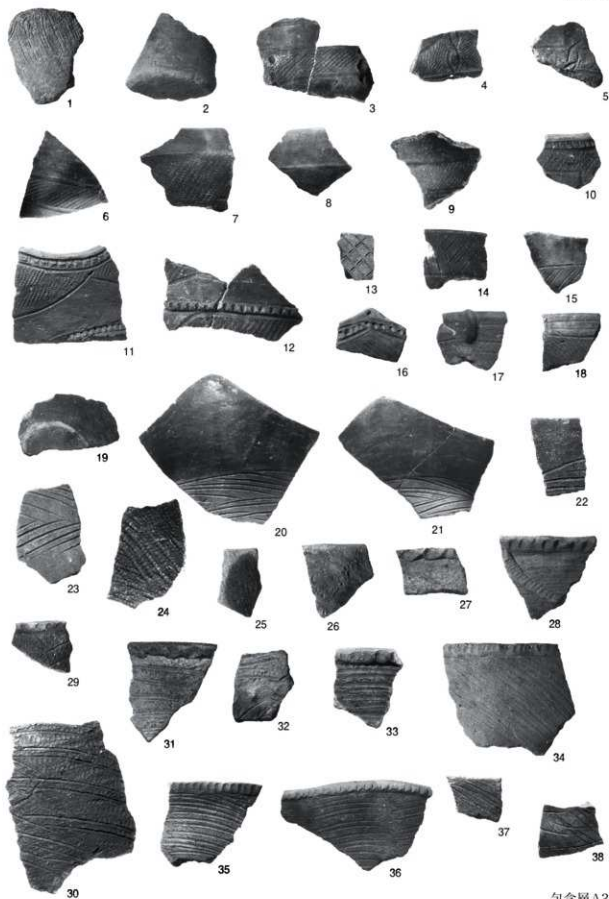
確認調査埋戻土、精査、包含層A1・A2 出土土器(1)

图版 4



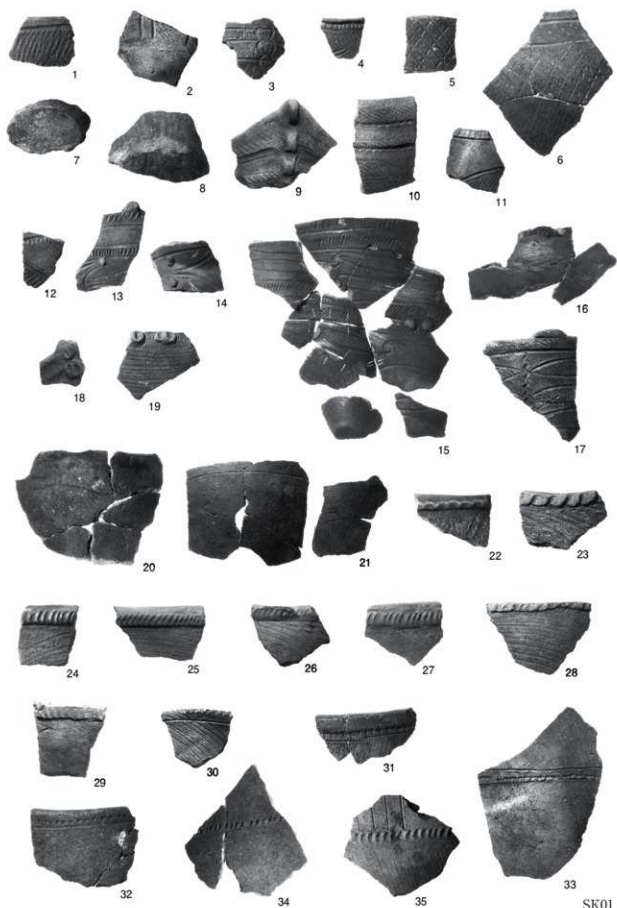
包含層A2 (2)

包含層A2 出土土器 (2)



包含層 A3

图版 6



SK01

SK01 出土土器



SK02



SK03

SK02、SK03 出土土器

千葉県草刈場貝塚

— 倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2025（令和7）年3月31日

編 集	株式会社ノガミ 千葉県成田市並木町221
発 行	千葉県教育委員会 千葉県千葉市中央区千葉港 1-1
印 刷	株式会社ライフ 千葉県成田市不動ヶ岡1128-15

報告書抄録

ふりがな	ちばし くさかりばかいづか							
書名	千葉市草刈場貝塚							
副書名	倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集機関	株式会社ノガミ							
編集機関所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL:0476-24-3218							
発行機関	千葉市教育委員会							
発行機関所在地	〒260-8722 千葉市中央区千葉港1-1 TEL:043-245-5960							
編著者名	松田光太郎（千葉市埋蔵文化財調査センター） 小川幹太、秋山真好（株式会社ノガミ）、宮内勝巳							
発行年月日	西暦2025年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇°〃	東経 〇°〃	調査期間	調査面積	調査原因
		区市町村	遺跡番号					
ちばし くさかりばかいづか 千葉市 草刈場貝塚	ちばし くさかりばかいづか 若葉区 貝塚町 973番地1・4	12104	若葉区 111	35° 37′ 30″	140° 08′ 40″	2024年 5月7日 ↓ 2024年 5月16日	11㎡	倉庫建設
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	貝塚	縄文時代後期前葉 から後葉		土 坑3基 ピット12基		縄文土器（加曾利B 式～安行2式）、 動物遺体		
要 約	今回の調査は草刈場貝塚の南東側貝層の北西端に位置している。現況は道路で分断されているが、本来は北西側に連なっていたと考えられる。調査により整地面を伴う盛土遺構が明らかになり、縄文時代後期中葉から後葉の土坑と柱穴状のピットも検出された。しかし、貝塚の一部と判断できる貝層は確認されなかった。出土遺物は土器片が主体であり、動物遺体も僅かに出土している。注目される遺物として、SK01から出土した東北系の特徴をもつ楕円土器（第3段階）がある。特徴から安行2式併行期に比定される。							